資料渉猟余話

その91

一枚の写真から ②

川合玉堂の天龍峡来遊

鎌倉貞男

平成元年の「週刊いいだ」に連載された原彰一執筆の「仙峡閣物語」(7・20付)によれば、昭和十一年、前回の中村不折に続いて、池上秀畝・石井柏亭等の著名画伯が天龍峡の仙峡閣に来泊したという。その後も、尾上柴舟や丹羽文雄といった著名書家や作家の来峡が続き、昭和十五年には日本画家川合玉堂が来遊した。

川合玉堂(芳三郎・一八七三〜一九五七)は、京都四条派に学び、次いで橋本雅邦に師事して、個性的な新境地を開いた近代日本画の大家である。日本的な詩情あふれる世界を描き、昭和十五年、文化勲章を受章した。この間に東京美術学校教授・帝室技芸員・帝国美術院会員等を歴任した。

その玉堂が、全通して間もない三信鉄道(現JR飯田線)に乗り、豊橋を経て親子で来峡したのは、同十五年春である。この時の様子は、竹村浪の人が発行した月刊紙「観光の飯田」60号(昭和47・7・20付)に詳しい。

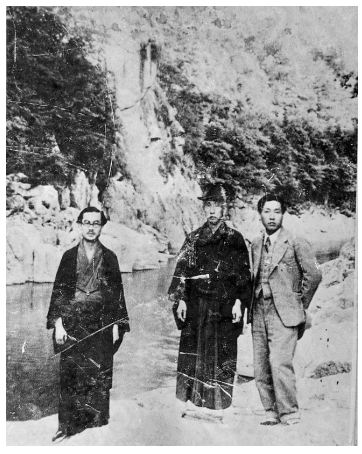
＊

仙峡閣に到着した玉堂は、茶を喫し終えると、すぐに眼下の仙牀盤から舟に乗り、磨崖碑十勝をめぐった。

案内したのは、羽織袴に威儀を正した宿の主人原貞造である。すると玉堂は、日下部鳴鶴が命名した詩名もおもしろいが、土地の人がそれ以前に呼びならわした名も素朴でよいから、両方話して欲しいと要望した。

そこで主人は、「垂竿磯」は「さぶり」、「帰鷹崖」は「鷹待岩」、「浴鶴岩」は「つるしね」、「炯々潭」は「てらが淵」……と、上流から順に元の名も添えて話すと、玉堂はたいそう喜んだ。

また、「仙牀盤」(千畳敷)では、大正二年、海軍の伊東祐亨元帥と上村彦之丞大将がここで小休止したことを話すと、自身も舟を下りて三人で写真を撮った。写真は、中央の玉堂を挟んで、右が令息の川合修二(洋画家)、左が宿の主人、原貞造である。



仙牀盤上の川合玉堂（中央）

＊

滞在中、玉堂は次のような短歌を詠んだ。

二百まり隧道くぐりむささびのおばしまかじる宿に寝しかな

当時、飯田線のトンネルは一七三あったようだが、ここでは歌調を整え二百あまりと詠んでいる。

後に主人自慢の一軸となったこの書の箱書が、如実にその様子を伝えている。

今年五月、豊橋より三信鉄道に乗りて天龍峡に遊び仙峡閣に投ず。その夜、月明らかにむささびしきりに鳴く。翌欄干に物の囓りたる痕あり。むささびなりと」

＊

これ以後、仙峡閣は「むささびの宿」と呼ばれた。

他の一首である。

きそひ鳴く小鳥の声に明くるかなむささび夜半にさけびし谷も

主人の談によれば、当時の天龍峡には、鶯・目白・時鳥・郭公・筒鳥・大瑠璃等、四季折々に五十種以上の野鳥の声が聞かれたという。夏には三光鳥も飛来し、「月日星ほいほい」と鳴いたという。

仙峡閣は全部で十三部屋あったようだが、中でも最高の部屋は、玉堂や不折が泊まった「錦の間」だった。老画伯はここで何を思い、どんな画を描いたのであろうか。

玉堂の没後、子息修二から、玉堂遺愛の菊花石と写生帳が仙峡閣主人に届いたという。玉堂父子にとって、天龍峡と仙峡閣がよほど印象深かったのであろう。

（故人敬称略）